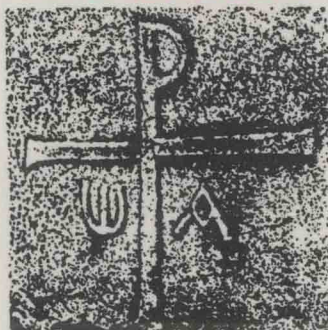


レオ一世 熊谷賢二訳

キリストの神秘
— 説教全集 —

キリスト教古典叢書 5



上智大学神学部編
P.ネメシエギ責任編集
創文社刊

キリストの神秘

レオ一世
熊谷賢二訳

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創文社刊

キリストの神秘〔キリスト教古典叢書5〕

1965年12月5日 第1刷発行

ISBN4-423-39205-4

1993年5月10日 第2刷発行

編 集 者 上智大学神学部

編集責任者 P・ネメシエギ

訳 者 熊 谷 賢 二

発 行 者 久 保 井 浩 俊

定価 5768 円 (本体 5600円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

緒言

『果てから果てまで力を及ぼし、すべてのものを慈悲ぶかく計らう』（知恵の書八の一）神の永遠の知恵は、その像を、特に輝かしく聖レオ一世教皇の心に刻みつけたと思われる。事実、この教皇は、……不屈の堅固さとともに、父のような慈愛をも豊かにそなえていることを示したのである。」これは、一九六一年十一月十一日、レオ教皇の死後千六百年を記念して出された、教皇ヨハネ二十三世の回章の冒頭のことばであるが、このことばはレオの姿を最もよく描写していると思われる。レオ自身、人間の心に刻みつけられた「神の像」についてたびたび語っており、神が人間を、ご自分の似姿とされ、われわれのうちにそのいつくしみの像を見いだそうとしてわれわれの心のともし火に火を点じ、ご自分の愛の炎を上げ、われわれがかれだけでなくかれの愛したもうすべてのものをも愛するようにされたのだということを（本文の説教二の十）、レオは強く確信していたのであった。

レオはさらに、神のこの恩恵が人間の協力を求めるということをも強く確信していた。それで、レオは、自分の信徒たちに向かい、たえず自分の創造主の善良さを模倣するように勧めるとともに、自分自身でも全生涯にわたり、神のみ旨を果たすことをたえず念頭に置いていたのである。このために、かれの周囲のすべてのものが破壊にひんしていったときにも、かれは確固たる「岩」のごとく、微動だにしなかったのである。一方、かれの父のような慈愛も、同じように、神のみ旨をことごとく果たそうとしたかれの信念に由来している。レオ教皇は、自分がローマ教皇として、キリストが「その愛の代用者」（聖アンブロジウス）として残された聖ペトロの「後継者」であることを、片時も忘れなかったのである。

さて、レオがカトリック教会の統治という大任を受けた時代は、まさに、最も強い堅固さを必要とした時代であった。紀元後五世紀には、西ローマ帝国は崩壊の一路をたどっていた。ゲルマンの蛮族たちは、フランス、スペイン、西北アフリカの大部分の地域を占拠していた。ゴート族の王アラルクは、首都ローマをも侵略し、略奪をほしきままにした。しかしアラルクが急死したので、ローマ人はようやくゴート族に対する隷属から解放されることができたのである。さらにまた、北方のダニュブ河岸からは、アッティラを首長とした兇暴なフン族の大群が迫り、南方のアフリカからは、ゲイセリクを王とするバンダル族が、かろうじて余命を保っているローマ帝国を脅かしていた。

しかし、政治的な情況がまったく混沌としていただけでなく、キリスト教会内部にも、非常に深刻な問題がもち上がっていた。事実、教会の東の部分は、長い複雑な闘争に悩まされており、教義上の問題、ある総大司教たちの野心、東ローマ帝国の諸地域間の政治上の争いなどは、教会の信仰と教会の一致とを大きな危険に陥れていたのである。さらに、ローマ皇帝の絶えざる干渉も、教会の問題をいっそう困難なものとしていた。これらすべての災難、争い、暴力、陰謀のうちにあって、レオ教皇の姿は、荘厳な柱のようにそびえ立っている。事実、暴力も、へつらいも、おどしも、疲労も、この人を正道からそらせることはできなかったのである。かれの周囲にあるすべてのものが、朽ち果て、くずれかかっていたとき、かれは、神の永遠の定めを凝視しつつ、ローマ帝国滅亡後にヨーロッパ文明の新世界を芽ばえさせる種子を、不退転の努力を重ねつつまいていたのである。したがって、後世の人がかれを呼んで「大聖レオ」といったのは、きわめて当然のことだったのである。

レオの誕生については、場所も年月もはっきりしていない。確かなことは、かれが、若いころからローマで教育を受け、まだ若年の身でローマの聖職者のうちに数えられていたということである。レオは、心の底から「ローマ人」であり、「ローマ人」としての性格を完全に備えていた。かれの姿は、昔のローマ共和国のあの偉大な人物たちを彷彿させるともいえるであろう。四三〇年ごろ、レオはまだ助祭 *diaconus* であったが、ローマ教会

ですでに大きな力を持っていた。古代教会においては、助祭は、司教の協力者として、司祭以上の発言力を持つことも珍しくなかったのである。レオがローマ教会の助祭であったとき、東方では、コンスタンチノープルの司教ネストリオスと、アレクサンドレイアの司教キュロスとの間で、キリスト論に関する激しい論争が戦わされていた。この問題は、四三一年、エフェソ公會議において解決され、ネストリオスは、受肉された神の御子イエズス・キリストが一つのベルソナであることをじゅうぶんに認めなかったために、異端者として排斥された。レオは、これらの論戦を大きな関心をもって見守っていた。そして、マルセイユの有名な修道士、ヨハネ・カッシアヌに、みことばの受肉に関してネストリオスの教えを論駁する論文を書くように勧めた。おそらく、すでにそのときから、神の御子の受肉の教義は、レオの思想の中心的事となっていたのであろう。この教義は、後に見るとおり、レオの説教、レオの神学を中心となったのである。

四四〇年、教皇クシストゥス三世(Xystus III)の没後、レオは教皇に選出され、同年九月二十九日、司教に叙階された。それから二十一年間、レオはローマの司教座から、全教会に対し不屈の意志をもって牧者としての配慮を示し続けたのである。

有名な歴史学者、フーゴー・ラーナー(Hugo Rahner)は、レオの性格を、かれの書簡のうちにたびたび出てくる一つのことば、すなわちモデラチオ(moderatio)ということばで特徴づけている。モデラチオとは、一言では翻訳することのできないことばである。モデラチオは、誇張や狂信をまったく知らずに、常に節度を守り、正義の規則に従って各自にその人に属するものを与え、そして、目的を見失うことなく、そのための手段を賢明に選び、適用し、機会を待ち、正されえないものを忍耐よく堪え、正されうるものだけを正す態度を意味する。カトリック教会は、聖トマス・アクイナスが適切に述べているとおり、「常に中道を進んでいる」から、レオがこのモデラチオの徳を備えていたということは、かれが教会の統治者として非常にふさわしい人であったことを示している。

このようなモデルチオは、確かに、貴重な性質である。しかし、その真価は、それがどういう目的を果たすために使われるかということにかかっている。それでは、レオ教皇がその行動の全般にわたって常にめざした目的とはどんなものであっただろうか。レオは哲学者ではなかったし、あまりに学術的で抽象的すぎる考察は好まなかった。したがって、もしだれかがかれのめざす目的はなんであるかを尋ねたら、かれはきわめて簡潔に、「わたしの望むことは、万事において絶えず、神のおきてを守ることである」と答えたであろう。しかし、かれの行動の目的を、もっと抽象的に定義することが許されるならば、われわれは次のように言いうるだろう。「レオ教皇の行動のすべては哲学者たちが *transcendentalia* (超越的概念) と呼んでいるもの、すなわち、一、真、善といふ三つの価値に向けられていた。」レオの追求したこの「一、真、善」は、ある抽象的で概念的な「一、真、善」ではない。レオが全心をあけて追求したのは、全能の神がその無限の自由な慈愛から、イエズス・キリストを通して人類に与えられる一、真、善であり、レオは、すべての人がそれらを行なうことができるかぎり完全に獲得するために、全力をあげて働いたのである。これらについて、一つ一つ観察してみることにしてしよう。

教会の一致

レオが全生涯にわたって最大の努力を傾けて追求した「一」は、キリストの教会の完全な一致である。レオは、教会がキリストの受肉そのものに起源を発することを確信していた。それで、キリストが唯一であるのと同じく、キリストと最も親密に一致しているキリストの教会も唯一でなければならぬと、固く信じていたのである。レオの考えによると、教会の一致は、ひとりびとりの人をただ精神的な方法でキリストに結び合わせる、ある精神的一致だけではない。レオの精神は、グノーシス派の影響のもとに、特に東方の多くの人々をとらえていた「霊性主義」とは、まったく異なっているのである。グノーシス派の「霊性主義」に染まった人々は、肉体を軽視し、

物質を軽んじ、教会の典礼上の集まりを避け、一般信徒の群れから離れていた。それに反してレオは、キリストのうちに真の十全な神性とともに、唯一のペルソナに合致した真の十全な人間性をも認めていたのと同じく、教会のうちに、信者ひとりびとりの神人キリストとの直接の神秘的な一致とともに、集団としての教会の目に見える一致、すなわち、司教の指導のもとに、ともに神を礼拝し、ともに悪魔と戦い、ともに天上の永遠の生命に向かう集団である教会の可視的な一致をも重視していたのである。教会という集団の一致の可視的な基礎は、レオにとって、キリストから使徒聖ペトロに与えられ、ペトロからさらにその「後継者」であるローマの司教たちに伝えられる首位権である。レオ教皇は、他のすべての司教たちのうえにある教皇の首位権を、その先任者たちのだれよりも強く主張したのである。そしてその首位権を、——もちろん、かれのモデラチオを絶えず保ちながら——全教会の進歩のために、よく行使しようと努めたのである。レオは、このように行なうことによって、キリストが聖ペトロにゆだねられた、「兄弟たちの心を固める」(ルカ二の三二)という使命を果たしているのだと確信していた。かれのこのような活動に対しては、もちろん反対もあった。一方では、コンスタンチン大帝時代から、ローマ皇帝は自分が教会の最高主権者でもあると考えていた。それで、レオも、——たとえば西ローマ帝国の不幸な皇帝、あの弱い性格のバレンチニアヌス三世とは親しい関係を保っていたとはいえ——教会の事に関して東ローマ皇帝の干渉を、たびたび経験したのである。また他方では、ローマ帝国の大都市の司教たち、たとえば、フランスのアルルのヒラリウスや、アレクサンドレイアの司教ディオスコロス、コンスタンチノープルの司教アナトリオスなどは、ローマ帝国の諸地方に自分自身の権力を徐々に拡張しようとし、レオ教皇の干渉をしばしば不快に思っていた。しかし、これらすべての苦難のうちにあって、レオは、たとえ実行のうえではかなりの柔軟性を示したとはいえ、自分の立場をけつして放棄することとはなかった。皇帝たちの皇帝教皇主義に反対して、「世俗の事がらと神に関する事がらとは、それぞれ異なった地盤のうえに立つものである」(書簡一〇四の二)という原理を、断固として守り通したのである。そして、ローマ帝国の西方で、全教会のすべての司教

の参集のもとに、コンスタンチノーブルの皇室の干渉をまったく免れた公会議を開催しようとして、何年間も——むだではあったが——努力し続けた。レオは、政治権力からの教会の独立と、教会の一致の礎石・ペトロの後継者としての教皇の地位とを強調することにより、中世紀と現代のカトリック教会の姿を準備し、それが、政治上の争いや神学上の論争によって分裂してしまうことを予防したのである。ここに、かれの活動の歴史上の意義がある。もちろん、レオが教会の一致と一樣化のために行なった具体的な行為のすべてが、賢明で有益なものばかりであったかどうかということには疑いをさしはさむ余地がある。たとえば、レオは、使徒時代からずっと後になって始められたローマの典礼上のならわしを、「使徒から伝えられたこと」として他の教会に押しつけたり、あるいは、キリストの制定になるものではなく、歴史的な発展によって起こってきた教会組織の制度（たとえば、総大司教があるきまった地方の他の大司教の上にあることや、大司教が司教の上にあることなど）を、「永遠に」保存すべきものであると断言したりしたのである。レオは、ローマ人として、ローマ人の性格上のある欠陥を免れることはできなかった。この性格は種々の長所を持つてはいるが、同時に、権力主義、伝統固守、一樣化などのような欠陥に陥りやすいことも否定できない。ローマ人のこのような傾向は、レオ以前にも、レオの後にも、教会において少なからぬ困難をひき起こした。教会の一致を強調するとともに、唯一の教会の中での正当な多様性をも強く弁護した聖アウグスチヌスも、すでにローマの聖職者間に盛んであったこの一樣化への傾向を嘆いている（書簡三六参照）。しかし、レオの名誉のために言わなければならないが、レオは、これらすべての問題において、自己愛の動機から自分の個人的な野心などのために行動したことは一度もないだけでなく、その説教や書簡から明らかなおと、かれの良心が義務であるとかれに告げたことだけ行なったのである。教会の一致は、人間の独断的な決定によってではなく、真理によってのみ保ちうることをレオは確信していたのである。

信仰の一致

真理における一致、すなわち、真の信仰における一致は、レオにとって、教会の一致の土台である。御父なる神は、真理であり、あわれみである。その御子イエズス・キリストは、ご自分のみことばと行ないにより、真理とあわれみをわれわれに現わされた。かれのあわれみを受けるものは、このイエズスが受肉された神の御子であることを信じ、救いと真理を、かれから受けたことを認める人々である。真の神であり真の人間であるイエズス・キリストに対する信仰と、われわれが救われるためにかれの恩恵が必要であることを認める信仰は、レオにとって、キリスト信者のキリストとの一致の土台であり、したがって、教会の一致の土台でもあるのである。レオがキリスト教信仰の内容について、理論的・神学的に深い探究に興味を持たなかったということも、おそらく、信仰の一致を重視することから生まれた結果であろう。レオによると、そうした深い論理的探究は好奇心を満足させようとするもので、争いと分裂に陥りやすいものである。ところが、キリスト教信仰のいくつかの重大な基本的真理は、はつきり不明な点のないように教えられ、信じられ、実践されなければならないのである。レオ自身、この根本真理を教会の教父たちのうちでだれよりも明瞭に告げている。レオのこの功績も、もちろん欠陥を伴っていた。かれのそれほど明瞭で澄んだ教義上の定式を読む人は、これらの定式のうちに信仰の奥義はもはや言いつくされ、それ以上述べるべきことは何も見あたらないのでそれ以上深い探究は無意味であると考えやすいのである。レオ自身、神学上の深遠な探究の大海に乗り出した神学者たち（たとえば、オリゲネス）を疑惑の目で見つめつつ、信仰をあまりにも簡単に考えすぎるこのような見方にいくぶんか陥ったのではないだろうか。たとえばレオは、キリスト論において、本質やペルソナということばをきわめて正確に用いてはいるが、本質がなんであるか、ペルソナがなんであるかといった問題に関しては、けっして、探究したり、それらの概念を明ら

かに定義したりしたことはなかったのである。かれはギリシア語を知らなかった。そのために、たとえばアンブロジウスの神学をあれほどまで豊かなものとしたギリシア教父たちの深遠な神学は、レオにとっては親しいものとはならなかったのである。しかし他方では、レオの才能のこのような限界は、教会の最高の牧者としてのかれの職務には適当なことであつたともいえる。教皇の務めは、深い難解な神学上の研究を個人的に行なうことではなく、聖書とキリスト教の伝承に従つて、キリスト教信仰の根本真理を、明確に、簡潔なことで述べることからである。レオ教皇は、この務めを最もよく果たしたのである。

レオの時代には、教義上の二つの問題に関する論争が教会の一致を脅かしていた。その一つは、恩恵に関するペラギウス派との論争であつた。レオが教皇に選ばれたときには、その論争は、本質的な点に関するかぎり、すでに解決済みであつた。アウグスチヌスの努力によつて、ペラギウス派は論破され、人間が救いを獲得するためにはキリストの恩恵が必要であることが、すではっきり認められていた。レオも、その説教の中で、アウグスチヌスに従い、人間の心の中に働く神の恩恵についてたびたび語っている。しかしながらかれは、あらゆる偏向と誇張を忌避する自分の性格に従つて、神の恩恵の必要性和ともに、この恩恵に協力する人間の努力の必要性をも強調している。しかし、かれは、恩恵と自由との相互関係の問題や、すべての人を救おうとする神の意志と予定説との関係というような複雑な問題には触れていない。Indignus（恩恵の必要性についての、教皇や司教会議の決定の記録集で、四三五年から四四二年の間にローマで作られたもの）の結末のことは、すなわち、「われわれは、異端者に反対した人々が広範囲にわたつて取り扱つた当面の問題のうちで、深い困難なものをついて無視しないが、それらをここで述べる必要はないと思う」ということは、レオに由来すると推測されるのである。必要以上に決定を下さないこのような賢明なモデラチオは、レオの神学全体に見られる特徴である。このようなモデラチオが、教会の一致を保つためにどれほど有益であるかは明らかである。神学上の論理的で複雑な問題においては、意見の相違は避けがたいからである。とはいえ、このような意見の相違も、キリスト教の教義の重大

な根本真理を犯さないかぎり、教会の一致を裂くことはないはずである。レオはその神学において、キリスト教のこの根本真理のみを教えることに没頭した。かれの神学は、「思弁的」なものではなく、「司牧的」なものである。そしてこれこそかれの神学の大きな価値なのである。

さて、レオの時代には、——かれのこのような賢明なモデラチオも一つの原因となつて——恩恵についての論争は、もはや教会の一致に重大な打撃を加えるほどではなかった。しかし、東方教会においてキリスト論に關して燃えあがつた論争は、教会の一致を重大な危険にさらしていた。そこでレオは、神の御子の受肉についての正しい信仰を守つて教会の一致を保つため、生涯にわたつて最大の労苦を堪え忍び、最大の努力を払わなければならなかったのである。カルケドン公会議において頂点に達した、このキリスト論に關する論争については、一九六二年紀伊国屋から出版された「ろごす」の第十一巻に詳しく説明されているから、ここではただ、レオ教皇の精神をよりよく理解するに足ることがただを、ごく簡単に述べておくにとどめよう。

四三一年のエフェソ公会議において、上述のとおり、アレクサンドレイアのキュリオスのもとに、ネストリオスのキリスト論が排斥され、次のことが決定された。すなわち、みことばはヒポスタシス（位格）的に人間性をご自分に一致させられ、こうして、把握できない方法で人間となられた。したがつて、神性と人間性の差異は一致によつて取り除かれなかったが、キリストは唯一のキリストであり、唯一の御子である。

キリストが真に唯一のおかたであることを強調するために、キュリオスはしばしば、「神のみことばの受肉した本質は唯一である」という表現を用いていた（しかし、エフェソ公会議そのものはこの表現をつかわなかった）。

エフェソ公会議のあとで、キュリオスに従う司教たちと、アンチオケの司教ヨハネに従う司教たちとの間で、困難な論争が続けられた。アンチオケ派は、キュリオスの定式が、イエズス・キリストが真の人間であり、神性のほかに、われわれ他の人間と同じ真の人間性をも持つておられることを、じゅうぶん明確に表現していないと

思っていたのである。この問題は、四三三年キュロスの司教テオドレトスの作った、いわゆる「協和信条」に兩派が署名したことにより、円満な解決に達することができた。その信条の内容は、次のとおりである。

「したがって、次のように宣言しなければならない。すなわち、われらの主イエズス・キリスト、神の御ひとり子は、完全な神であり、また同時に理性的な靈魂と肉体とを備えた、完全な人間である。神性を持つおかたとしてこの世の前に御父より生まれたもうたかれは、終わりのときが来て、われわれのため、われわれの救いのために、処女マリアから人間性をとってお生まれになった。かれは、神性の点で御父と同質であり、人間性の点でわれわれと同質であらせられる。こうして、二つの本質の一致が行なわれた。このためにこそ、われわれは唯一のキリスト、唯一の主を宣言するのである。

われわれはこの混合のない一致のために、聖なる処女が神の母であることを宣言するのである。神であるみことばは肉となり人間となり、受胎の瞬間から、彼女からとった神殿へすなわち人間性」をご自分に一致させられたからである。

神学者たちは、主について述べられた福音や使徒たちのことばのうちで、あるものは一つのペルソナについて述べられた共通なものと考え、あるものは区別して、二つの本性のひとつについて述べられたものと考え、すなわち、神に適合するものをキリストの神性について述べられたものとし、低い位置を示すものをキリストの人間性について述べられたものとするのである」(Denkungen, Enchiridion Symbolorum 二七一―二七三)。

この信条は、キリスト教信仰の根本真理をよく表わしている。三位一体の第二のペルソナであり、永遠のみことばであり、御父の永遠の御子であり、御父と同じ実体を持たれるおかたが、人間となられた。すなわち、真に全能、不変、不可見の神でありながら、同時に、御父の永遠の御子が、時間のうちに生まれ、成長し、話し、苦しみ、死に、復活したと真にいうるように、マリアからとられた人間性をご自分に一致させられたのである。

アレクサンドレイアのキュリロス自身、この協和信条を誠実に受け入れ、自分の派の人々もこれを受け入れる

ように努力した。しかし、かれの死（四四四年）後、キュロス派の人々のうちで、極端な説を唱える者が力を得てきた。その有力な代表者は、コンスタンチノーブルの大きな修道院の僧正エウティケスであつた。かれは、キュロスの使つた「一つの本質」ということばを取りあげてそれを誇張し、キリストの神性と人間性は、一致の後、キリストのうちに一つの本質しか認められないほど一致したと主張した。エウティケスのこの主張は、コンスタンチノーブルで大きな騒ぎをひき起こし、この町の司教フラビアノスによって召集された司教会議は、エウティケスを異端者として排斥した。エウティケスはそれに服従せず、アレクサンドレイア、エルサレム、ローマの司教たちに提訴した。レオは、エウティケスの控訴とフラビアノスの報告を受けたとき、この問題に関して強く介入する必要があることを悟り、四四九年六月十三日、フラビアノスに対して有名な書簡をしたため、その中で自説を説き明かした。この書簡は、普通、「レオのトムス」と呼ばれており、われわれはこれをこの本の末尾に載せることにした。この書簡の中で、レオは、みことばの受肉に関する正統信仰を、非常に澄みきつたことばで説明している。エウティケスに対して、レオは、キリストが完全な神性と完全な人間性を持ちつたことを強調している。唯一のキリストのうちに於けるこの二つの本質は、どちらもそれぞれの固有の性格を保っている。キリストは、唯一のペルソナであるが、二つの本質を持つておられるのである。

レオのこうした介入にもかかわらず、エウティケスの一派は、テオドシオス二世の宮廷に権力のある保護者を持つていたので、その後数カ月の間に、コンスタンチノーブルで勢力を伸張していった。キュロスのあとアレクサンドレイアの司教座を継いだディオスコロスも、かれの味方にまわつた。ディオスコロスの指導のもとに百三十人の司教たちがエフェソに集まり、四四九年八月八日、フラビアノスとその味方の司教たちを司教座から追放し、エウティケスに赦免を与えた。皇帝テオドシオス二世は、この会議の決議をことごとく承認した。一方追放された司教たちは、——その中にはキュロスのテオドレトスもいたのだが——レオに控訴した。もちろんレオは、エフェソの会議の決定を受け入れることはできなかった。こうして、教会の一致は最大の危険にさらされる

こととなった。エフエソの會議のあとの数カ月は、レオの生涯にとって、最も困難な時期であつた。レオは、一方では、みことばの受肉についての正しい信仰を完全に擁護することを固く決意していたのであるが、他方では、東方教会と西方教会との間に決定的な分裂が起ることを、極力避けようとしたのである。したがって、この期間にレオは、その当時實力を持っていた東ローマ皇帝の介入を避けるために、遠くローマ帝国の西方で、全司教が参集して一つの總會を開くよう、八方手を尽くして試みたのであるが、テオドシオス二世はこの提案を拒否し、ディオスコロスとその一派も、自分たちの勝利をのがすようなことに同意するはずはなかった。しかし、まったく思いがけない事件がこの難局を打解してくれた。テオドシオス二世は、落馬して、四五〇年七月二十八日、急死したのである。テオドシオスが死去してから、エウティケスの立場を擁護した宮廷の一派も、勢力を失墜した。帝国の支配を受け継いだテオドシオスの姉のプルケリアとその夫のマルキアノスは、レオ教皇の教えにのっとって教会の問題を解決しようとした。そのとき、レオはまだ公會議を西方で開くことを固執していたが、新しい皇帝もこの求めに同意しようとしなかったもので、いつものモデラチオから、コンスタンチノーブルに近いカルケドン市で公會議を開催することに同意した。公會議は、四五一年十月八日、五百人以上の司教の参列のもとに開かれた。何日かの討議の後、ディオスコロスは排斥され、司教座から追われた。公會議に派遣された教皇の特使も、公會議に参集した司教たちも、公會議がキリスト論に関して新しい信条を作らんではないなかつたが、皇帝は、公會議がある明瞭な信条を作るようにかれらに迫つた。困難な討議の末、問題はついに解決された。司教たちは、四三一年のエフエソ公會議によって認められたキュリオスの書簡のいろいろな表現や、「協和信条」、レオのトマス、コンスタンチノーブルの司教フラビアノスの信仰宣言から取られた表現を合せて、一つの「新しい信条」を作つた。しかしその信条には、新しいものは何もはいつていなかった。公會議によって認められたその信条は、次のとおりである。

「われわれはみな、聖父たちに従い、心を一つにして、次のように教え、かつ宣言する。

われらの主イエズス・キリストは、唯一の同じ御子である。

かれは、神性を完全に所有するとともに、

人間性を完全に所有したもう。

かれは、真の神であるとともに、

理性的な魂と肉体から成る真の人間である。

かれは、神性の点で御父と同質であるとともに、

人間性の点でわれわれと同質でありたもう。

かれは、罪を除くほかは、あらゆる点でわれわれと等しくありたもう。

かれは、神性を持つおかたとしてこの世の前に御父から生まれ、

さらに人間性を持つおかたとしてこの終わりの時代に、われらのため、またわれらの救いのために、神の母

処女マリヤから生まれたもうた。

かれは、同じ唯一のキリストなる御子、主なる御ひとり子であり、二つの本質をもって混合せずに、変化せ

ずに、分かつたれずに、離れずに存在したもう。

——それは、本質の差異は一致によって取り除かれず、反対に、二つの本質の特質は保存され、〔両方の本質は〕唯一のベルソナ（位格）と唯一のヒポスタシス（自存者）にともに含まれるからである——

キリストは、二つのベルソナに離れたり分かつたれたりせず、

唯一の同じ御ひとり子、神のみことば、われらの主イエズス・キリストである。

これは、預言者たちがかれについて告げ、イエズス・キリストご自身われわれに教えられ、教父たちの信經がわれわれに伝えたことである。」

レオは、カルケドン公会議のこの信経を、大きな喜びをもって受け入れた。この信経には、レオが絶えず擁護したこと、すなわち、同じ唯一の神の御子イエズス・キリストが、真の完全な神であるとともに真の完全な人間でもあることが、全教会の信仰としてはっきり認められていたからである。この信条は、レオにとって、すべてのキリスト信者にとつてと同じく、ある抽象的な思考ではない。かれ自身書きしるしているとおり、「キリスト・イエズスにおいて、人間性は真の神性なしには存在せず、神性は真の人間性なしには存在しない。カトリック教会は、これを信じる信仰によって生き、この信仰によって栄える。」（書簡二八―レオのトムス―の五）。信者は、この信仰によって神人イエズス・キリストと一致し、かれを通して、神との善における一致へ前進するのである。レオは、すべての信者の獲得すべきこの一致のために、いつも全力を傾注していた。したがって、ここでまだ説明しなければならぬことは、この、信者の善における神との一致を、レオがどのように理解していたかということである。今から、このことについてもっと詳しく説明しておこう。というのは、ここに邦訳されたレオの説教の意味を理解するためには、このことに関するレオの考えを正確に把握しておくことが、非常に有益だからである。

神との一致

レオにとって、神は、いつくしみそのものである。このいつくしみの神は、人間をご自分の像として作られた。それで、人間の使命は、自分の創造主の模倣者となり、自分のうちに神のいつくしみの姿をいっそう明らかに反映させるということである。

さて、神が、この世に生きている人間を神の愛を模倣しうるものとされる具体的な手段は、神の御子の受肉の